

「ひなちゃんのクイズ」

中学 2年生

もも、黄、白、色とりどりの花が咲きほころぶ春。

うぐいすの鳴き声を待ちわびて、あいばあちゃんはえん側でこっくりこっくり。

「また気持ちよさそうに居眠りして。かぜをひかないようにね。」

孫のひなちゃんが、そっとはあちゃんの背中にお布団をかけてあげた。

ひなちゃんはあけぼの小学校の二年生。

お友達と遊ぶことが大すき。

春にはいなか道を行進して、つくし採り。たくさん採れた日にはお母さんにお料理してもらおう。

でも、まだ小さいひなちゃんは、

「にがいよお。」

半分泣きそうな顔をして、それでも、

「お友達と競争して、自分で採ったつくしだもん。」

と少し得意気に、がんばって口に運ぶ。

するとそこに、夕方まで眠ってしまったばあちゃんが、

「春のいい香りがするねえ。」

とゆっくり歩いてきて、ひなちゃんのお皿をのぞいた。

ひなちゃんは鼻をびくびくさせて、

「このつくしはだれがつんできたでしょうか。」

ばあちゃんにクイズを出した。

「だれだろうねえ。私は眠っちゃっていたから分からないなあ。お母さんかな、ひなちゃんかな。」

「答えを教えてあげるね。このひぎのきずを見れば分かるでしょ。お友達と競争して、背の高いつくしに向かって思いっきり走ったの。そのつくしがこれ。競争には勝ったんだけど、転んじやったの。この一番長いつくしは、ばあちゃんにあげるね。」

「どうもありがとう。ひなちゃんがひぎにきずまで作って、採って来てくれたつくしだもんねえ。感謝していただくとするよ。」

ばあちゃんは、一本のつくしをもぐもぐ。

「おいしいねえ。春の香り。幸せ、幸せ。」

ばあちゃんは何でもゆっくりゆっくり食べる。

つくしをにこにこの笑顔で食べてくれたばあちゃんの横で、ひなちゃんは、

「私にはほんの少しにがいから、おかわりどうですか。」

こちらもにこにこ、二人は春のお日さまのような顔をして、春の味を楽しんだ。

台所からは、また別のいい香り。

「お母さん、今日の晩ごはんのメニューはなあに。」

ひなちゃんお得意のクイズに

「ひなちゃんが幼稚園のときに、掘って採ったことがあるものだよ。なあんでしょ。」

こちらもクイズで答えた。

ひなちゃんは眉間にしわを寄せて、腕組みをして考えた。

「ううん、竹の子、竹の子でしょ。」

「当たり前。大正解。」

お父さんの帰りを待ちきれず、ひなちゃんはおかあさんの目をぬすんでつまみ食い。

ところが、

「いたいよお。お母さん、この竹の子かたいよお。」

「おかしいなあ。さっき味見たときには完ぺきだったもの。」

「どれどれ。ひなちゃん、こっちへおいで。」

口をゆがめて、今にも泣き出しそうなひなちゃんを、ばあちゃんが手招きして呼んだ。

「あはははは。」

ばあちゃんが大きく口を開けたのにつられて、思わず開けたひなちゃんのお口には、

「竹の子と、ぬけたばかりのかわいい白い歯が見えましたよ。」

「あはははは。ぐらぐらしてた歯がぬけたんだ。竹の子はやっぱりやわらかい。」

ばあちゃんが、ひなちゃんのかわいいお口からかわいい歯を取り出して、ひざ枕で愛らしく笑うひなちゃんにこう言った。

「これからもずっとずっと、お母さんが言う通りに、歯をしっかりと磨いて大切にしていね。自分の手で掘った竹の子や、お友達と競争して採ったつくしは格別においしいよね。」

旬の食べ物を自分で採って食べる。幸せなことだね。食べることは生きること。食べることはひなちゃんの心を豊かにして、ひなちゃんの体を大きくする。

ひなちゃんがりもりたくさん食べるために、なくてはならないものは何でしょうか。」

今度は、ばあちゃんの口からクイズが出た。

「ええと、ええと。」

ばあちゃんが自分の歯をさわって、ヒントを与えてあげた。

「歯。まっ白な歯。」

ばあちゃんが優しくうなずいたので、前歯が一本抜けたひなちゃん的笑顔も輝いた。

「お庭に大きなひまわりが咲くころ、ひなちゃんの新しい歯が顔を出すかな。」

ばあちゃんは入れ歯が入ってるから、ゆっくり少ししか食べられんの。

これからどんどん大きくなっていくひなちゃんは、丈夫で健康な歯で、ぱくぱくもりもりたくさん食べてね。」

ひなちゃんは背伸びして、体を大きく見せた。